

## 書 評

川口幸大・堀江未央編、『中国の国内移動—内なる他者との邂逅』京都大学学術出版会、2020年、310p.

高山陽子\*

本書は2000年代以降、フィールドワークを実施してきた8名の文化人類学者による中国の国内移動に関する共同研究の成果である。周知のように、現代では中国が特有の戸籍制度を有し、歴史的には漢族が移動を繰り返しながら「中華」を拡大してきた。漢族の移動によって先住民である少数民族との間にコンタクト・ゾーンが形成され、邂逅から融合へ向かった例もあれば、武力を伴う軋轢から共存へ向かった例もある。本書の特色は、移動者の視点と受け入れ住民の視点を意図的に交錯させながら、衣食住のレベルにおいてコンタクト・ゾーンで起こった／起こっていることに着目した点である。

漢族が移動を繰り返したといっても、それは一枚岩ではなく、商人のように他者との邂逅に慣れている場合と、農村出身で他者との邂逅に慣れていない場合がある。また、少数民族でも歴史的に漢族と接触し続けてきた場合や、ほとんど漢族と接触することがなかった場合もある。概していえば、コンタクト・ゾーンでの体験を繰り返してきた漢族と、コンタクト・ゾーンにおける軋轢を避けるかのように生活してきた少数民族はコントラスト

を成す。

国内移動の政治性に関する批判は、こうした漢族と少数民族の間の不均衡な力関係だけではなく、「民工」（都市で出稼ぎをする農民）の劣悪な労働環境、「支辺移民」（辺境を支援するための移民）や「生態移民」（生態系を回復させるための移民）、「三峡移民」（三峡ダム建設に伴う移民）などの半ば強制的な移住政策に対するものなど多岐に渡る。ただし、歴史的な移動から現代的な移動まで、これほどの多様な移動の在り方がひとつの国の枠組みの中で分析できるのは、中国研究の強みのひとつである。この点を踏まえ、本書は各自のフィールド調査に基づき、21世紀の国家における移動の諸相を捉えようとしている。

では各章の内容を簡単にまとめたい。

序章「国内移動をいま論じる意味—中国と日本」（川口幸大・堀江未央）は、漢族の移動の歴史や戸籍制度と出稼ぎの問題を整理したうえで、コンタクト・ゾーンという概念を中国の国内移動の分析に用いる妥当性を述べている。すなわち、非対称な二者が出会い形成されたコンタクト・ゾーンで衝突が起こりながらも、ある期間を経ると両者の差異は適切な具合で残り、安定した社会空間を形成するという。

第1章「あんたがおれの百度だ—珠江デルタの『本地人』と『外地人』」（川口幸大）は、広東への出稼ぎ移住者と地元の人々の交流を扱う。改革開放の恩恵を受けた広州は、1980年代から香港や台湾からの移住者が多く、コンタクト・ゾーンにおける差異の存在

\* 亜細亜大学国際関係学部

は自明になり、広東語が通じなければ共通語を話すのは日常的な風景となっていった。こうした「他者慣れ」の事例からコンタクト・ゾーンにはグラデーションがあると論じている。

第2章「都市を出る人，都市に来る人・戻る人—広東省の地方都市汕尾の事例から」（稲澤努）は、出稼ぎ労働者と香港帰りの人、汕尾の地元人が作り出すコンタクト・ゾーンを言語や食という側面から分析している。汕尾では、かつてもっぱら広東語と汕尾語が話されており、出稼ぎ労働者が話す共通語は見下されていたが、近年では共通語が広く使用されるようになった。また、四川出身者が増えるにつれて、辛い物嫌いだった広東の人々も、特に若い人を中心に辛い物を好むようになっていった。こうして使用言語による差別意識がなくなっていったという。

第3章「出稼ぎ先は『小さな国連』—浙江省義烏市に暮らすムスリムたち」（奈良雅史）は、「他者慣れ」の事例として義烏のムスリム商人を扱っている。義烏は、いわゆる百均のような安価な日用品の卸売市場が広がり、世界各地から商人が集まる国際的な商業都市である。広州ほど規模は大きくないが、多様な人々が集まり、その多様性を相互に認め合うところが「小さな国連」であると述べる。ここまでが沿海地域を扱った第1部である。

第2部は、第4章「移動の危険に対処する呪術—雲南ラフの男たちと出稼ぎ」（堀江未央）に始まる。出稼ぎに出たラフの男性たちが春節で村に戻ると、仕事の厳しさやカル

チャーショックのみではなく、彼らが見た都市の漢族の印象についても話すという。漢族が意外にも「シャトッパ」（アニミスト）であるとか、男性たちが「口功」という呪術を用いて難を逃れたといった話が含まれる。本来、治療としての呪術であった「口功」が、出稼ぎ先というコンタクト・ゾーンの中で防衛としての呪術に変換されたのではないかと分析する。

第5章「移動が生み出すトランス・エスニックな子ども服—雲南省から貴州省へ流通するモン／ミャオ族衣装と民族間関係」（宮脇千絵）は、貴州省で売られているミャオの子ども服を事例として、コンタクト・ゾーンの中で子どもの民族服がエスニシティを越えたことを論じている。観光化が進む西南の少数民族地域では、見栄えのする民族衣装が売れ筋であり、女性たちは自分の民族以外の衣装でも制作している。ただし、一般的に異民族の衣装を着るのは子どもに限定される。それは、子どもが社会的規範にとられない領域を作り出すためだとする。

第6章から第8章が第3部である。第6章「出稼ぎに行くのは甲斐性のない人—モンゴル人の移動と生活基盤」（包双月）は、ソーリ（基盤／甲斐性）という言葉から内モンゴル自治区の人々がコンタクト・ゾーンとしての出稼ぎをどのように認識しているかを分析している。遊牧を営んできたモンゴル人にとって移動は日常茶飯事であったが、出稼ぎは農地と家畜というソーリ（基盤）が足りないことを意味し、恥であるとみなされている。商売に長けた漢族のように成功すること

は希であり、都市へ行っても失業する可能性も高い。出稼ぎに対する否定的な価値は近年、ますます強まっている。

第7章「君たちは何をしている人なのか？—広西三江県におけるマカイ人の定住と地域社会」(黄潔)は、広西三江県の福祿江(現、溶江)流域において、マカイ人(客家)・トン・ミャオの3者が形成してきたコンタクト・ゾーンについて論じている。19世紀半ば、客家が転入してミャオの住む土地を奪って福祿街を作り、土地を奪われたミャオは山地へ移住する。さらにミャオは出稼ぎに行ったトンの土地を奪い、トンは福祿街の周辺に集落を作る。こうした土地の争奪合戦があったにもかかわらず、トンはマカイ人の媽祖信仰とその祭祀を受容し、現在に至る。それはトンとマカイ人の通婚による文化融合の結果であるとする。

第8章「移りゆく『辺境』イメージ—上海から雲南への『支辺』移民の語りを通して」(孫潔)は、1950年代から60年代の「支辺」(辺境を支援する)のために上海から雲南へ移住した人々の語りを扱う。「支辺移民」は、自らの選択は政治的に正しかったと思いつつも現在では上海へ戻りたいという思いを募らせる。一方で様変わりした上海に自分が馴染めないのではないかという不安も抱く。「支辺移民」の抱えるノスタルジーは空間的というよりも時間的な隔たりに起因する。これは多くの中国の年配者と共通するものである。

終章『境界越しの邂逅』の持つ可能性」(堀江未央)では、COVID-19の拡大の中で

の移動や中国研究における移動の重要性などを論じて、本書を締めくくる。

このように本書では、ほぼ全ての論考で出稼ぎが扱われている。ただ、「出稼ぎ移住者」「出稼ぎ移民」「出稼ぎ者」(第1章)、「出稼ぎ労働者」(第2章)、「出稼ぎ者」(第4章)など多様な呼び方をするのは、やはり分析する地域における出稼ぎの意味の違い、すなわち、出稼ぎを受け入れる側と送り出す側の違い、だと推測される。第1部の沿海部の事例は受け入れる側で、第2部・第3部は送り出す側である。この違いがコンタクト・ゾーンの在り方にどう影響するのかについても、今後、議論してほしい。

「出稼ぎ」の呼び方におけるバラツキのように、論集では各論において概念の扱い方に濃淡が生まれるのはやむを得ない。そのため論集の書評には、「各論は面白いが、全体としてのまとまりがなく、何を主張したいのか不明」という批判がしばしば寄せられる。編集担当者にとって、どこまで各論の内容に介入するかは悩ましい点であろう。もちろん、表記を統一するのは当たり前であるが、さらに、論の進め方や事例の提示方法などに修正を求めるのは難しい。論文執筆の作法は、各研究者が指導教官に論文指導を受けながら、長い時間をかけて培ってきたものである。論文指導は受けても、編集方法の指導は受けることがない。ところが、研究者としてある程度のキャリアを積むと、突然、編集担当の任務が降りかかってくる。出版物である以上、読みやすさを最大限、考慮しなければならないが、各論執筆者への敬意も払わなければ

ばならない。これは編集担当者のジレンマである。

解決法を示すのは難しいが、たとえば、各章のタイトルを統一させるのもひとつの方法だろう。第1章や第6章、第7章のタイトルが語りを引用しているように、他の章も同様に、第4章「本当のシャトゥパは漢族だった!」、第5章「何族のものということはない」、第8章「やっぱり上海に帰りたい!」のようにしてもよかつたのではないだろうか。

長岡 慶.『病いと薬のコスモロジー—ヒマラヤ東部タワンにおけるチベット医学, 憑依, 妖術の民族誌』春風社, 2021年, 399p.

鈴木正崇\*

本書は、東ヒマラヤのタワンに居住するモンパと呼ばれる民族集団の人々が、病気の文脈を通して、チベット医学の専門家や村の伝統的治療者、施薬師、僧侶などどものようにつながり、薬や道具、神霊を媒介にして、病気の世界と自らの身体を連動させて生きていくかという実態を描く民族誌である。生活者の視点から現代における伝統医療の変貌を考察し、人々が経験する「病い」の意味付けや医療実践を幅広く論じている。フィールドワークは2010年から2016年まで断続的に行なわれ、言語はチベット語とヒンディー語に、日常会話としてタワン・モンパ語を使用

している。

タワンは、北東インドのアルナーチャル・プラデーシュ州のタワン県に属し、中国との国境紛争地帯で、外国人だけでなくインドの人々の入域も制限される、著者も1ヵ月の入域許可証を現地で1ヵ月ごとに更新して調査を継続したという。調査の難しい地域での堅実なフィールドワークに基づく本格的な医療人類学の研究として評価したい。広義のチベット医学の医療実践を扱う必要性から、調査地はタワンに限定されず、ダラムサラ、サルナート、ダージリンなどを含むマルチサイト・エスノグラフィーの性格を帯びる。

構成は以下のとおりである。

#### 序章

#### 第I部 チベット医学の開発

##### 第1章 チベット医学の制度化とアムチ

##### 第2章 チベット薬の標準化とタワンの人々

#### 第II部 ナツァの病いとチベット医学の実践

##### 第3章 タワンの暮らしとナツァの治療

##### 第4章 チベット医学の診療実践

#### 第III部 神霊と妖術における病いと薬

##### 第5章 神霊ルーによる病いと開発

##### 第6章 憑依と宗教薬

##### 第7章 毒盛りの妖術と民間薬

#### 終章

第I部では、チベット医学の制度化がインドでどのように展開したかという歴史的な脈絡と、制度化されたチベット医学とタワンの

\* 慶應義塾大学名誉教授

人々との繋がり過程を論じる。タウンではアムチは近年まで身近な存在ではなくローカルな家系もなかった (p. 96) という。変化の実態が焦点となる。第1章では、チベット医学を、古代の『ギューシ』以来の歴史的展開として概観した後に、チベット難民の流入以後、インドでチベット医学が新たに伝統医療の開発の文脈に置き換えられ、ソワリグパの名のもとに統合され制度化された状況を述べ、専門組織 (メンツィカン)、医療専門家 (アムチ)、社会活動家の間での対立と交渉を明らかにする。第2章は、チベット薬がアムチを介して標準化 (standardization) され大量生産に展開した過程を辿り、人とモノのネットワークや協働の多様性を論じる。標準化とは生産において原料や機械設備、作業方法、業務手続などを一定の基準に統一して規格化し、生産の効率化や合理化を図ることである。タウンに制度化されたチベット医学が流入すると、アムチが薬草採集に乗り出して協働で開発する動きが生じた。さまざまな担い手の相互交渉をアクターネットワーク論、薬草をバウンダリーオブジェクト論で論じ、民衆が制度を支えるアクターとなる過程を明らかにする。

第II部では、タウンで制度の中に位置付けられたチベット医学の実践に焦点をあてる。ナツァと呼ばれる病いの治療にあたっての現地の人々間での経験の実態や、治療方法を論じ、制度化されたチベット医学と民間医療の実践との関わりを検討して、身体経験の変容を明らかにする。第3章ではチベット文化圏にタウンを位置付けたうえで、日常

の暮らしを描写し、地域史を概観し中印国境の紛争がもたらした劇的な変化に言及する。1980年代には仏教文化復興運動や政治運動が激化し、タウンの地を「モンユル文化」として再構築する地域ナショナリズムの動きが展開した。制度化されたチベット医学の浸透はこの動きと連動し、病いの経験や意味に大きな変化を生じさせたのである。地元では病いはナツァ、ヌパ、ドーの3種に区分されている。ナツァは飲食物、生活環境、気候などに連動して起こる病い、ヌパは神霊がもたらす祟りや憑依で生じる病い、ドーは人やモノ、環境から毒を齎されることで生じる病いである。本章はナツァの民間治療者の実践である真言吹き治療や柄杓治療について精細な聞き書きを行ない、日常の病いの経験と制度的医療の重なり合いや歴史と身体との繋がりを述べる。第4章では、村でのナツァ治療者の実践を、制度化された医療である診療所でのチベット医学の実践の実態を通して明らかにし、チベット医学や生物医療の制度化の外にある民間医療との部分的繋がりを論じる。治療者とタウンの人々が共有する「古いナツァ」と「新しいナツァ」の区別に着目し、ナツァの経験を通して立ち現れる身体が多層性を論じる。アムチや患者、スタッフの間のモノや実践を介したやりとり、ナツァにおける身体と複数の医療との関係を明らかにする。制度化、文脈、関係、ネットワークなどのキーワードが生会話を考察につなげる役割を果たしている。

第III部では、チベット医学の制度の外に置かれている医療実践で、ヌパやドーという病

いに関する治療や予防実践を論じる。ヌパは状況に応じて内容が吟味され、対処方法や病いの経験も多様である。ヌパへの対応には仏教僧院で作られる宗教薬（真言を籠める、ルーメン、メンチー）の服用や僧による儀礼が執行され、ドーには一部の村人が調査する民間薬（ドーマン）が使用される。チベット医学や生物医療では治療できない、さまざまな対処方法や独自の薬の服用が試みられる。第5章では、ヌパのひとつとされる神霊ルーの祟りによる病いとこれに対応する医療実践を具体例を通して紹介し、穢れや禁忌の侵犯に対する浄化儀礼の実態を明らかにする。ルーの祟りの発生は、村人の争い、道路建設、国境紛争、開発が大きな要因となっている。タワンの人々は、身体を浄化する香木や供物、祠など具体的なモノを通して環境との循環を構築し、身体の実験はルーと同化して語られる。環境の変化と病いになることをルーを通して経験し、日常でもルーへの配慮を怠らないという。しかし、仏教復興運動や環境保護運動の展開によって、高僧や政治家や社会運動家による「モンユル文化」構築の動きが進み、オールタナティブな実践としてルーは包摂されたり排除されたりするようになったとする。第6章では、憑依と宗教薬を主題として、悪霊の憑依による病い、神降ろしの儀礼、学校での悪霊の憑依の流行、宗教薬のやりとりの実践など、儀礼とモノとの関わりから身体と他者との関係を明らかにする。特に悪霊祓いに関わるラージュカン（クテン）と呼ばれる世襲の神降ろしが、ローカルな巫者から次第に成長して亡命政府のチ

ベット難民の治療に携わるようになる過程は現代の変動と対応して興味深い。第7章では、ドーの事例を検討する。ドーは特定の間人やモノや環境から齎される多様な毒であり、妖術師ドーマが使うという。タワン北西部P地方と西部D地方でのドーマの家系を取り上げて、毒盛りの妖術の実態を論じる。重要な点はP地方はチベット（ツォナ）に、D地方はブータン（タシ・ヤンツェ）に隣接し、かつてはトランス・ヒマラヤ交易の通商路として栄え、多様な余所者と地元が相互交渉する開かれた地域であったという歴史的背景の影響である。聞き書きを通じて、毒盛りによる身体変容と民間薬のやりとり、妖術師と村人との関係を通じて、毒とは何かを明らかにし、悪の実態に迫る。総じて、病いの経験を文脈を通して考察すると、それらが制度（近代）に取って代わられつつある過去の遺物ではなく、現代の暮らしの中で新たな重要性を帯びていることが示される。第6章と第7章の理論的考察には、南アジアでは、「分割可能な人格」が生成され、日常的実践でも儀礼でも人々はさまざまなモノのやりとりを介して身体に内在される行動規範のコードが決定され、モノの流れの中で実体化されるというサブスタンスとコードの理論を援用したうえで、身体が食物や土地との関係だけでなく、薬や神霊、紛争や開発など多様な要因と関連していることを明らかにして、変化と脱構築の過程を動的に描き出す。

終章では、チベット医学の開発とタワンの人々の医療実践を、複数の身体と病い、薬、環境が絡まり合うと指摘して、病いと共に生

きることの意味と経験を総合的に論じた。

本書が評価されるべき点は、伝統と近代、制度的医療と土着医療という二項対立を越えて、「現地の人々の生きられた世界に焦点をあて、病いや治療実践を通していかに制度、医療、身体が関わり合うのか」(p. 21)を多角的に論じたことである。理論的な貢献としては、ヴィヴェイロス・デ・カストロの存在論的研究をさらに深めて、コスモロジーは概念と知識の体系ではなく、人・モノ・言葉の配置を通じて身体を介して感得される生きられた世界であることを実証的に示したことがある。複数の自然と複数の身体との照応を認識の出発点として、生活世界の多角的な諸相を病いを通して描いた試みとして評価したい。

本書の前半の主題はチベット医学の制度化で、1980年代にタワンにはダラムサラの専門組織からチベット人のアムチが派遣されて医療実践が変容し、地元との協働での医学開発プロジェクトが進行した経緯を丹念に描く。制度化を通して地域社会の医療実践の変容や再構築が広い視野から描かれている。後半はタワンの地元の視点に転換し、病いの3分類を示し、チベット医学に包摂されるナツァと、枠組みの外のヌパヤドーに分けて、制度化と制度化以前の関連を明確化した。そしてヌパヤドーに処方する宗教薬や民間薬の重要性を指摘し、薬がもつ豊かな意味の喚起の諸相に注目した。公式化された医療と非公式な諸医療の相互で、病いや治療が新たな文脈で経験され再構築される過程が明らかになった。タワン・モンパはチベット人ではな

い。チベット語は一部の人しか知らず文字も普及していない。モンパの言葉には文字がなく口頭伝承が基本である。<sup>1)</sup> 本書が言語の困難性を越えてコスモロジーを丁寧に現地語の文脈から読みほどこうとする姿勢を高く評価したい。

本書で最も生彩を放つのは魅力的な対話である。個々の語り口が生き生きとして小さな物語の連鎖として読める。時々筆者自身もその中に書き込まれる。タワンの診療室で、アムチと患者と周囲の人々が、チベット語とタワン・モンパ語とヒンディー語が飛び交う中で、次第に症状を確定し治療方法を見つけ出すという場面には本書の主題が凝縮されている。話者と筆者のかかなりの信頼関係がなければこれだけのフィールドワークは出来ない。

問題点としての第一は、本書の「病い」の概念は医療人類学の illness で、社会的文化的に構築される (p. 21) と明記しながらも、対比概念である「疾病」 disease への言及や説明が本文にも注にもない。「病い」と表記して、西欧医学や生物医学の「疾病」とは区別される「病気」であるという医療人類学の見解を積極的に明示する必要があったのではないか。

第二はタワンの人々という一括した括りである。タワン・モンパが考察の主役であることは確かだが、神降ろしのラージュカンはディラン出身で、ドーの妖術師はゼミタンが

---

1) タワンやディランのモンパを水野一晴はチベット人と記述し、チベット語の知識でモンパを解釈しているが誤りである [水野 2012]。

本場である。モンパとはモンユル（南の回廊）の人の意味でチベットの南という位置関係を示すだけである。ゼミタンはパンチェンパで、モンケット話話者のタワン・モンパとは言葉が異なり、ディランはツェンラ話話者でタワンの人々とは言葉が通じない。タワンは巨大な僧院があってチベット仏教の影響が強いが、ディランは仏教徒だが在地信仰が根強い。神降ろしのラージュカンはディラン出身で民間信仰への信頼が基盤にあり、タワンの人々にとっては「よそ者」のゆえに強い呪力を期待され発揮できると考えられたのではないか。

第三はP地方やD地方という記号化された地名である。確かに個人情報の保護は大事であるが、略記号を用いることで、妖術発生の歴史的背景や文化的社会的基盤の探究が曖昧になってしまった。ゴルサムチョルテンが妖術の本場で果たす機能や意味、ルーとの交渉過程（p. 256）の背景にある仏教復興運動の在り方が問われる。チベットとの古い商業ルートとしてP地方は繁栄し、貧富の差が拡大して、嫉妬や怨念による妖術が発生しやすい環境にあったのではないか。魔女伝説の館も近隣にある。場所が特定できないと説得力ある記述は難しい。評者はPやDの現場を知っているがゆえに隔靴搔痒の感に囚われる。

第四は今後の課題であるが、仏教復興運動や政治運動との動態的関連である。T.G. リンポチェ（ツォナ・リンポチェ）やドルジ・カンドゥ等の僧侶政治家の動きや、母語でもないチベット語をボーティ語という名称のも

とに公用語化する運動、<sup>2)</sup>モンユル・ナショナルリズム運動とチベット医学の制度化との連動など、タワンの民間の伝承知は複雑な現代化の中で揺れ動いてきた。タワンは国境紛争地域なので外来者の往来も多く、軍用トラックが日々行き来し軍隊の駐留地もあり、インド平原の文化も否応なく入ってくる。他方、自立化を目指し財政立て直しのために観光化にも乗り出したが、タワン僧院のロープウェイは試運転のみで未使用のまま放置された。大量に流れ込む開発資金と汚職と賄賂が続く。タワンでの変化はグローカリゼーションの典型であり、地域の変容は現代世界を映す鏡でもある。

タワンも含めてアルナーチャル・プラデーシュ州は人類学者にとってやるべき課題が満載の垂涎の地であり、今後のさらなる展開を期待したい。

#### 引用文献

- 水野一晴. 2012. 『神秘の大地, アルナチャル・アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会』昭和堂.  
 脇田道子. 2019. 『モンパーインド・ブータン国境の民』法蔵館.

2) タワン・モンパの歴史・政治・開発の全容に関しては〔脇田 2019〕を参照されたい。



Kumiko Sakamoto. *Factors Influencing Child Survival in Tanzania: Comparative Analysis of Diverse Deprived Rural Villages*. Singapore: Springer Nature Singapore Pte Ltd., 2020, 195 p.

新福洋子\*

本書はタンザニアの子どもの死亡について、人口統計データによる包括的な概要とケーススタディの集約的な分析により、子どもの生存のための概念枠組みをアセスメントし、相互扶助の役割を示そうと試みたものである。

本書の第 1 章は、序論と各章のまとめである。冒頭に子どもの死亡をグローバルな視点で捉えた本研究の意義と、タンザニアにおける 5 歳児以下死亡率、地域ごとの死亡率とその格差を示している。特に経済的に困窮する地域における相互扶助について、著者の先行研究で扱ってきた女性を中心とした相互扶助の倫理が、疾患や死亡に必ずしも影響を与えていなかったという結果を示し、このことから派生した問いとして、子どもの死亡に焦点を当てた“subsistence ethics (サブシステンスの倫理)”と“actual subsistence (実際のサブシステンス)”のパラドックスを、困窮地域の社会的構造から調査することを目的とすると説明している。

第 2 章は、子どもの死因について先行研究のレビューを行なっている。最初に、ユニセフの概念枠組みを用いて各種の因子を説明

している。枠組みは、直接的、根本的、基本構造的な因子に分かれた形で、直接的な因子は飢餓と疾病であるが、根本的な因子には、家庭での食糧不足、母子ケアの不足、医療サービスの不足と非健康的な環境があり、基本構造的な因子は、政治・イデオロジーの上部構造や経済構造である。この枠組みでタンザニアの先行研究を分析すると、直接的な因子は肺炎、マラリア、下痢症、貧血であった。根本的な因子には、医療施設へのアクセス不良、水と衛生環境の悪さ、食糧安全保障の不足、出産間隔の短さと授乳の不足が含まれた。出産時のケアの質の低さ、母親の教育レベルの低さも子どもの死亡の根底の因子であり、さらに、基本構造的な因子として社会経済ステータスと家族の関係性を含んでいたことを説明している。

第 3 章では、人口統計データを用いた地域間のデータ分析にて地域における特徴的な因子の探索を試みている。子どもの死亡率と地域ごとの低栄養状態や食事内容などの因子との相関分析では、都会の子どもの死亡率が高く、農村地域の子どもの死亡リスクが高いことを示している先行研究に疑問を投じている。加えて、リンディ州、ドドマ州、北ウングジャ州は、夫による妻の稼ぎに対する意思決定や監視が強いことと、子どもの死亡率との関連が示された。

第 4～6 章は、子どもの死亡率が高い地域の村の状況と、それぞれの村の子どもの死亡に関連した課題を詳しく説明している。第 4 章は 2014 年、15 年に行なわれたドドマ州のマジレコ村の女性の調査結果、第 5 章は

\* 広島大学大学院医系科学研究科

リンディ州ムチンガII村の2014年の研究に基づいた女性の質問紙インタビュー調査結果、第6章は、2015年の調査に基づいた北ウングジャ州のチャアニ、マシングニ村の女性の調査結果を紹介している。

第7章は、上記3つのケースに基づいた子どもの死亡と他の因子のクロス集計と相関分析を行なっている。結果として、医療施設から母親が受けた知識によって子どもの生存率が改善すること、出産中の新生児死亡が3つ全てのケースに共通しており、子どもの死亡に相関していたこと、また食糧の質とジェンダーの関係性が子どもの死亡に影響をもつことが示された。3つ全てのケースで相互扶助と子どもへの食糧の共有が子どもの生存に影響していたが、子どもの薬への金銭的な援助を受けている女性の方が乳幼児の死を経験するなど、薬代をめぐる相互扶助は子どもの生存に寄与していなかったことを示している。

第8章は、本書の主題でもある「相互扶助は子どもの生存に貢献するか」の問いに応えるため、主要な影響因子と関連課題の地域による比較分析を行なうことで、村や州ごとの特性を示している。たとえば、相互食糧援助は大陸側でより優位に影響していた。教育レベルが比較的低い村では、母子保健に関する知識の違いを生み出していた。ここで「ケア」の概念が用いられているが、家族の大きさと女性の存在として定義され、ザンジバルにおいては、よりケアのある、つまりは女性の多い大きな世帯の子どもは、生存の機会が高かった。しかしながら、これは農業遊牧の

大きな拡大世帯には当てはまらなかった。

本書の独自性は、経済的に困窮した地域に焦点を当て、サブシステム経済の強みと弱みを特定しているところにある。2002年において困窮した村の状況を、2012年の人口統計データの改善と比較することで、特に理解の難しい都市部の子どもの生存に関する課題について、サブシステム経済による説明の可能性を示している。

私は助産学研究をタンザニアで実施してきた経験から、新生児死亡に関しては触れることがよくある。ユニセフが出版しているタンザニアの新生児死亡率のデータ [UNICEF 2021] では、都市部に住んでいるほど、経済的に豊かであるほど、また母親の教育レベルが低いほど新生児死亡率が高いと報告されている。グローバルな報告では都市部や経済的な豊かさは新生児死亡率に優位に働くという報告 [Smith and Trinitapoli 2020; Yaya *et al.* 2019] があり、そうした矛盾を説明するのに地域の特性を用いている点で、本書の指摘は参考になった。医学的な研究では、相互扶助を子どもの死亡の関連因子として扱うことは珍しい。しかし直接的に死亡につながるヘルスサービスへのアクセス、水環境と衛生、食糧、教育について、アフリカの地域においては相互扶助が関連しているといわれてみれば確かに納得感がある。こうした内容も統計分析だけでは実際が読み取れないものの、ケーススタディとして地域研究が含まれていることで、その内容に厚みをもたせている。

以下分野の違いもあつた外れな点もあるかもしれないが、本書の不十分に感じた点を2

つ挙げる。本書のベースとなる第2章の文献レビューであるが、昨今医学系の研究であれば、文献レビューに際し、どのデータベースで、何のキーワードで論文が検索されたのか、そこからどのようにレビューされた論文が選択されたのか、さらには選ばれた論文の質評価がされたうえでレビューが行なわれるが、この章にはそれらに関する記述が見当たらない。そのため、この文献レビューが書かれた当時の文献を網羅的にカバーできているのか、一部の論文が抽出されているのかが判断できない。

また、本書の難しい点は、各章、つまりは文献レビュー、人口統計の分析、ケーススタディが独立して存在しており、それぞれに調査内容が多岐に渡るため、興味深い内容ではあるが、統合して何が言えるのかは、最後の章まで読み進めないで理解することが難しい。各章に本書が一貫して何を言っていて、それぞれの章がどのようにそれに貢献しているかの記述があると、読み進める中で全体のリサーチクエスチョンが少しずつ解明されていく面白さが出たのではないかと思う。

相互扶助と保健／保険に関する研究を挙げると、堀井ら [2017] がブルキナファソで母子保健に寄与するソーシャルキャピタルの研究を行なっている。対象地域にはマイクロファイナンスが広がっており、マイクロファイナンスを通じたソーシャルキャピタルには、物質的・情動的・情緒的支援が含まれていたが、そのメンバー以外に効果が波及されないことが指摘されている。また、ガーナにおける相互扶助が「顔の見える関係」、対面

的な要素を強調することは、医療保険についての浜田 [2010] の記述にもみて取れる。本書でも相互扶助が村全体を含むわけではないことを指摘しており、「ケア」を、地域差を含めてさらに研究するように示唆している。「ケア」というキーワードが、この with/after コロナ時代に注目を浴びており、昨今の国際学会でも散見される重要なテーマであるため、本書をケアの視点から掘り下げてみたい。

アネマリー・モルの『ケアのロジック』 [2020] と比べると、本書で扱われているケアの定義は狭い。『ケアのロジック』では、自由選択とその責任を個人が負う「選択のロジック」と対比し、「ケア」を、複数の手がひとつの結果のために（長い時間をかけて）共に働く、どうにかしようと試行錯誤するプロセスとして扱う。困窮地域において、子どもの食糧を適切な量と内容で確保し、提供することはまさしくケアである。著者は最後に、ケアの子どもの生存への影響の地域差について「なぜ」そうなっているのかを問うように勧めているが、おそらくここでいう「なぜ」はケア自体をプロセスで考えないと辿りつかないように思う。女性が多くても、家族が大きくても、ケアのプロセスが働かないと子どもの食糧を適切に確保できないからである。

もう一点、権力者に奪われるケアについても興味深い記述が複数ある。第4章のUnyago（少女に対して行なわれる生理に関する教育）に関して、子どもや女性の死亡率が高まる若年妊娠や間隔の短い妊娠を予防す

る内容を含んでおり、女性が女性をケアする習慣とも捉えられ、ひいては子どもの生存にも寄与しうる。しかしながら、この習慣が女性器切除 (FGM) と共に行なわれていたために、政府からの FGM 禁止命令と共に失われてしまった。また、第 8 章の出産時の伝統的産婆 (TBA) のケアについても、政府が国際政策に沿って施設出産を強制的に執行していったため、それが女性にとっても看護師にとってもなぜだかわからないままに、TBA が提供しているケアが奪われてしまった実情を記している。Unyago や TBA によるケアが国際政策に沿わない要素を含んでいるがゆえに、そこに含まれるケアのプロセスが失われるということが起きている。

一方 Tada ら [2020] は、タンザニアにおいて授乳に関する正しい知識と misconception (誤った認識) が混在していることを記述しているが、授乳というのはそれ自体が子どもの生存に直接的に影響するとして、ユニセフを中心に国際社会が推進しているため、授乳自体が禁止されることはない。授乳の行動の中で、正しい知識と誤った認識を、ケアのプロセス (授乳自体や授乳支援) を壊さないようにして切り離していく必要がある。Unyago や TBA のケアも、その地域に肯定的に働いている要素を国際社会が認識する必要がある。

著者は巻末に政策提言をまとめているが、子どもの死亡を減らすために、女性の意思決定を後押しする点は、国際的なジェンダーの論調とも重なる。しかし著者も指摘しているとおりその地域におけるジェンダーによるバ

ワーバランスの影響は未だ大きい。その中で「決めるのは女性が良い」とターゲティングする発想に進んでしまうと、「選択のロジック」に近づき、そこに政策や権力的なパワーが加わると、男性が担っている肯定的な役割が失われることになりかねない。関わる者全員をチームの一員とし、ケアのプロセスを壊さないようにするには、「家族を巻き込んだ教育」や「意思決定に女性も参加する」ことを推奨したい。意思決定者を誰かひとり決めるといっても、みんなで話し合い、誤った認識を切り離しながら、最終的な子どもの生存に何が必要かに辿りつけることが重要ではないか。子どもへの食糧確保や子どもの生存という因果関係が一直線ではない現象を扱う研究は、ケアのプロセスで理解していくことで、今後のさらなる発展が期待できると考える。

#### 引用文献

- 浜田明範. 2010. 「医療費の支払いにおける相互扶助—ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75(3): 371-394.
- 堀井聡子, Kam Alimata, Kam Gouba, Solange Esther, Minoungou Arsène and Tapsoba Valérie. 2017. 「ブルキナファソ農村部でマイクロファイナンスに参加する女性のソーシャルキャピタルの特徴—混合法を用いた探索的研究」『国際保健医療学会誌』32(4): 217-231.
- モル, アネマリー, 2020. 『ケアのロジック—選択は患者のためになるか』田口陽子・浜田明範訳, 水声社.
- Smith-Greenaway, E. and J. Trinitapoli. 2020. Maternal Cumulative Prevalence Measures of Child Mortality Show Heavy Burden in sub-Saharan Africa, *Proc Natl Acad Sci USA*

- 117(8): 4027-4033.
- Tada, K., Y. Shimpuku and S. Horiuchi. 2020. Evaluation of Breastfeeding Care and Education Given to Mothers with Low-birth-weight Babies by Healthcare Workers at a Hospital in Urban Tanzania: A Qualitative Study, *International Breastfeeding Journal* 15(1): 36.
- UNICEF. 2021. Tanzania—UNICEF Data. ([https://data.unicef.org/wp-content/uploads/country\\_profiles/United%20Republic%20of%20Tanzania/country%20profile\\_TZA.pdf](https://data.unicef.org/wp-content/uploads/country_profiles/United%20Republic%20of%20Tanzania/country%20profile_TZA.pdf)) (2021年10月19日)
- Yaya, S., O. A. Uthman, F. Okonofua and G. Bishwajit. 2019. Decomposing the Rural-urban Gap in the Factors of Under-five Mortality in Sub-Saharan Africa? Evidence from 35 Countries, *BMC Public Health* 19(1): 616.

古沢ゆりあ、『民族衣装を着た聖母—近現代フィリピンの美術、信仰、アイデンティティ』清水弘文堂書房、2021年、viii+264 p.

宮脇聡史\*

本書は、著者が2017年に総合研究大学院大学に提出した博士学位論文を修正加筆したものであり、近現代フィリピンにおける、民族衣装や民族のシンボルを身にまとったさまざまな聖母像をその研究対象とし、像の成り立ちや普及の背景とこれをめぐる言説、作り手の意図や受け手の思い、グローバルな価値基準の影響のもとこれを評価する内外の人々のまなざしを描き出している。そして聖像の多様な位置づけを、美術、信仰、そして国民

的なアイデンティティの問題を組み合わせ、論じることで解明しようとしている。

「はじめに一聖画像が“生きている”国」で著者は、聖像がフィリピンの人々に特別の強い思いを抱かせることについて自身の経験から引き、印象的な導入を作り出している。

「序章 民族衣装を着た聖母—包摂と異化の視覚表象」は聖母像の現地化をめぐる背景について概観している。まず「民族衣装」というアイデンティティ表象を用いることを「文化の客体化」とし、それが近代以降の聖像の現地化の特徴であると指摘している。またアジアの聖母像の現地化の事例を紹介し、そこでの「宣教美術」や「土着キリスト教美術」に関心を示す西洋人宣教師などの外部者の存在の重要性を挙げ、現地の動きと国際的な動向の相互関係の中で、各地で現地の衣装をまとった聖母像が創出されたとする。

「第一章 フィリピンにおける聖母崇敬の歴史と図像—マゼラン上陸からピープルパワーまで」は、フィリピンにおいて聖母崇敬と聖母像が定着し現在に至る過程を描いている。また現代の信者たちによる聖母崇敬の実践と、そこでの聖母像の役割を概観している。多様な称号の聖母像が広く崇敬され、聖母像行列などの行事がもたれていること、新たな像の導入や創出が続いていることが丹念に描かれており、こうした歴史と信仰実践が民族衣装の聖母像の誕生の背景にあるとしている。

「第二章 バリントワックの聖母—革命とフィリピン独立教会」は、フィリピンで最初の現地の衣装をまとった聖母像とされる「バ

\* 大阪大学大学院言語文化研究科

「リントワックの聖母」について、フィリピン民族主義とキリスト教を背景としたシンボルの操作と新たな表象の生成を、歴史資料から明らかにしている。この聖母像は20世紀初頭の独立革命期にカトリック教会から分離したフィリピン独立教会で生み出され、民族衣装をまとい革命の闘士の夢に現れて彼らを救ったという由来譚をもつ。著者はこの伝説と像が生成した時期について文献資料をもとに検討し、図像は1924年までに成立し、その考案者はイサベロ・デ＝ロス＝レイエスと推定されるとしている。また、この像が「母なる祖国」の象徴とされることを踏まえ、図像学における「祖国」の擬人像である女性像と位置づけが可能であること、またフィリピン独立教会の合理主義的・民族主義的思想が反映されている点を指摘している。

「第三章 ガロ・B・オカンボ作《褐色の聖母》—ローカルカラーとフィリピン近代美術」では「褐色の聖母」という絵画作品を取り上げ、画家の提示しようとした自文化像と、外国人を含む受け手が求めたフィリピンらしさとの間、アイデンティティの交渉過程という観点から解釈している。フィリピンにおける近代美術運動の中で画家オカンボが、聖母子像という西洋美術由来の主題を再解釈して聖母をフィリピンの農村女性として描いたこと、ある宣教師の擁護で評価が好転し、以後海外でも展示されるなど美術界に一定の影響を与えたことを考察している。また最初の展示当時の新聞記事の写真と現存の作品が部分的に異なる点を指摘し、作品の評価の変化が作品改変につながった可能性を論じて

いる。

「第四章 バランガイの聖母—信仰刷新運動、民間信心、奇跡譚」では、西ネグロス州シライで戦後設立されたカトリック信徒団体バランガイ・サン・ビルヘンの現地化した聖母像「バランガイの聖母」の由来と実践をフィールドワークに基づき描き出し、共同体の中での受容や奇跡譚に着目して考察している。この聖母像は組織の創設者の依頼で作成され、この信仰刷新運動の守護聖人となり、既存の西洋式の聖母像と並んで崇敬されてきたという。著者はこれを、現地の衣装をまとった聖母像が、民族アイデンティティという近代国家的な言説を超えて、ローカルな民間信心の文脈で受容されていると解釈する。

「第五章 新たに生み出される現地の聖母—『フィリピンの聖母』と『フィリピンのマドンナ』」では、近年登場した現地の聖画像である「フィリピンの聖母」と「フィリピンのマドンナ」を紹介している。ギマラス島のトラピスト修道院の神父が着想し、島の先住民の職人に制作させた「フィリピンの聖母」の彫像と、マニラ在住のある信徒がキリストのお告げを受けて聖母崇敬を広めるべく画家に描かせた「フィリピンの聖母」の絵画、マニラの聖パウロ修道会で画家の神父が描く「フィリピンのマドンナ」は、フィリピンの母親の理想像や、フィリピン社会の刷新への祈願といった「母」や「国」というイメージを打ち出し、視覚化している、とする。

「終章 まとめと考察」では各章の議論を要約したうえで、聖母が民族衣装をまとうという現象について、近代国家や近代美術の形成

という文脈の中で生み出されるものと、従来のローカルな信仰実践の中で実現するもの、という2つの方向があることを指摘している。キリスト教美術の現地化をめぐる国際的な動きの文脈の中の複雑なまなざしの交錯、崇敬の対象としての聖画像と近代美術の概念の相違と連続性、信心のあり方や民族的出自の多様性といった論点を確認し、さらなる調査が必要な課題を挙げている。

本書は、近年活発なフィリピンにおける宗教実践についての人類学研究の中に位置づけられるが、聖母信心については個別研究を超えて広範な意義を解明しようとした研究は少なく、デラクルスの聖母研究の成果 [De la Cruz 2015] に続く貴重な業績といえる。

既存の聖母崇敬の研究は在地の宗教実践の解明を中心課題としており、これに対し民族衣装をまとった聖母像を対象を絞り、人類学だけでなく美術研究の観点を織り込んだ本書は過去に類例がない。「もの」としての宗教実践に着目し、グローバル、ナショナル、ローカルといった多層的な捉え方を重視しているバウティスタの研究と重なる関心であり [Bautista 2019]、今後のフィリピンの宗教実践に関する研究の発展のひとつの方向を示している。また各事例の詳細な叙述も優れている。特にガロ・オカンボの「褐色の聖母」が改変の過程を経ていたことを過去の資料を踏まえて明らかにしたことは重要な発見と考えられる。さらに本書は、従来の研究が軽視しがちだったグローバルな流れ、特にカトリック教会の方針や聖像をめぐる教会の世界大の動向、美術に関する国際的な潮流などの中

に、ローカルな実践を位置づけることに成果を上げている。

但し、課題と思われる点も散見する。各章の素材の多様性は本書の内容の豊かさを示す反面、統一感に課題が残る。近代主義的な少数派宗教、近代美術、地方の信徒団体による信心業、個人や聖職者によるキリスト教の現地化の試み、と主体と行為がまちまちで、共通項は「フィリピン」というナショナルな空間の中での民族衣装を着た聖母像、となる。研究対象の設定の時点で、グローバルなものやローカルなものに合わせて考察するという本書の趣旨からは本来は再吟味の対象となるべき「フィリピン」というナショナルな空間の設定が、ほぼ自明の前提として扱われている。ナショナルなものを共通項として語るとはどこまで有効なのか、という点については課題が残る。

また著者が指摘するとおり、フィリピンでは民族衣装を着ない聖母が主流である。その中で民族衣装を着た聖母がどう位置づけられるのかについては、民族主義やアートの文脈では作り手の意図との結びつきが明快に示されている反面、宗教実践の文脈ではかなりあいまいである。評者は特に、5章における、聖母子像として描かれた絵が、ある人にはただの母子の絵と認知された、というエピソードが印象に残った。作り手が民族衣装を着た聖母像を企図しても、それが他の聖母像と同列扱いだったり、逆に受容どころか、それと理解すらされないこともありうる。民族衣装を着た聖母が「認知されない」「理解されない」可能性すらあるという、本書の研究

の土台を問い直すような検討も不可欠ではないか。

加えて、歴史記述で1986年の民主化革命に触れているので、これを記念して建てられたエドサ大聖堂の上に屹立する「エドサの聖母像」についても触れるべきではなかったか。この像のもつ政治的な含意についてはクラウディオによる鮮やかな分析がある[Claudio 2013]が、そこには街の景観やその中における聖像の美術的（あるいは図像学的）な考察はみられない。著者による今後の取り組みに期待したい。またローカルな文脈での聖母像も政治性を帯びるという点は、第4章の叙述から明らかである。バランガイ・サン・ピルヘンの創始者が、共産主義に対抗するため、共産党の組織のあり方を参考に活動を作り上げた点の指摘があるが、これを大地主制の社会矛盾というローカルな文脈や冷戦下のカトリシズムと共産主義という国際的な運動同士の対立と交渉という文脈に乗せて、聖像の置かれた位置を考察する余地もあるのではないか。

以上の課題も、本書の成果や意義を踏まえたところから生じるものであり、本書の価値を減じるものではない。本書は宗教実践や美術に関する新しい研究領域を開いており、著者や評者自身を含めた研究者たちに多くの課題を投げかけている。

#### 引用文献

Bautista, Julius. 2019. *The Way of the Cross: Suffering Selfhoods in the Roman Catholic Philippines*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Claudio, Lisandro E. 2013. *Taming People's Power: The EDSA Revolutions and Their Contradictions*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

De La Cruz, Deirdre. 2015. *Mother Figured: Marian Apparitions and the Making of a Filipino Universal*. Chicago and London: University of Chicago Press.

清水 展. 『噴火のこだまーピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』(新装版), 九州大学出版会, 2021年, 392 p.

土田 亮\*

本書は1991年6月15日に起こったフィリピン・ルソン島西部ピナトゥポ山の大爆発を契機に、「甚大な被害をこうむった、先住民アエタの被災と生活再建の歩みの記録であり、それに関わった私自身の関与についての自省と総括であり、(中略)被災を契機として彼ら彼女らが先住民としての自覚を強め、民族としての再生あるいは新生と呼びえる状況を作りだしてきた経緯についての報告と考察」(p. 1)であり、著者が10年以上にわたって現地に赴き、現場の行き詰まりを切実にまとめた労作である。なお本書は2003年に刊行された同題本に、新装版あとがきと前書きのカラー写真を追加したものである。

本書は序論・結論を合わせた8章から構成されている。以下では、本書の構成について紹介する。

第1章「序論」では、本書が出版される

\* 京都大学大学院総合生存学館



に至った経緯が述べられている。著者の活動記録や観察記録を概観しつつ「ホームとフィールドの往還を繰り返す」(p. 16) 人類学者の思索と反省の記録であることも吐露している。そのうえで、現代における関与することの人類学のあり方をめぐるひとつの主張の書として本書を位置づけている。

第2章「ピナトゥポ大噴火とアエタ民族の危機—運動の言説をめぐる内省」では、著者が噴火後のアエタ救援・支援活動に巻き込まれ、実践的に、ときには煽動的なかたちで支援に携わる中で、「民族としての存亡の危機」という運動の言説を主張し続けたことへの反省と分析がなされている。著者は民族存亡の危機を代弁したことを、単に自己批判するのではなく、地域の歴史と政治が結びついた伝統文化や民族の動態を他者がどのように表象できるのかという、人類学そのものが直面している課題に関わるものであると、アイスやインディオの事例も参照しながら指摘している。

第3章「他者を表象すること—フィールドワーク・民族誌・コミットメント」では、サイドのオリエンタリズム批判以降の人類学者の態度を標榜しつつ、異文化を活写するという人類学のテーゼをめぐる学術的論争に言及しながら、著者がアエタ社会に関わることや描くことの責務を述べている。アエタへの援助がキリスト教のチャリティーに基づいているとしても、「未開で遅れた哀れなアエタたち」という平地民の無知と偏見を含んだ表象や、憐憫や好奇心、尊大さが混じった態度が、アエタたちを傷つけたり困惑させたり

していた。支援や通訳などに携わった著者は、その責務として、現場で自らの身体をもって経験することを通して、自己の葛藤や彼ら彼女らの窮状と徹底的に向き合うことが重要であり、そこに人類学者の新たな可能性があると考察している。

第4章「噴火と想起—彼らの語りに耳を傾ける」では、噴火と避難生活についてのアエタたちの語りで構成されている。そこから浮かび上がったのは、被災、避難、再定住に際してのアエタたちの苦悩に満ちた体験であった。人々が逃げ込んだ洞窟に火砕流が流れ込み、失われた命を目の当たりにした者、平地民とともに暮らすことに適応できずに苦しんだ者、避難所から戻っても土地や農地が一掃されており、生活再建の見通しがつかない者などの物語が綴られている。それが苦難と困窮、不穏な様相に満ちたものであったかを、ありありと読み手に語りかける。一方で、被災者であるアエタが自らの窮状を語ることを通じて民族の自覚を生み、驚きと喜びが入り混じった感情をもちつつ明確な意識変化がアエタたちの中で生まれたと著者は説明する。

第5章「開発介入の理念と歴史—人類学そしてピナトゥポの現場から」および第6章「被災の苦難を超えて—生存戦略と民族の新生」では、ピナトゥポ山の噴火前後に、アエタに対して外部社会からもたらされた開発・復興プロジェクトの分析とその批判がなされている。第5章では人類学の関与と開発をめぐる問題群を検討し、第6章では生活を取り戻す中での組織化に注目している。

これらの章では、開発に巻き込まれる少数民族・先住民が生活の再建過程や政治的な自覚をもつことを通して、自主的で内発的な発展の主体へと変容していくプロセスが描写されている。この過程が下敷きにあつて、はじめて「開発の目的が、(中略) 差異を生きる人々の多様性の混融と共存を目指すものでありうる可能性」(p. 150) をもつと著者は提示している。

第7章「自立の模索・先住民の自覚—リーダーたちの声」では、第4章に続きアエタ自身の語りに戻る。ここでは連盟や協会の立ち上げや先住民の運動など異なる活動戦略をとるリーダー5人のインタビューが記録されている。これらの声に加え、著者による先住民権利法と鉱山法に対する補足と批判的解説を通観することで、先住民が自立の方途をいかにして獲得し、自民族としての自覚をもつに至ったか、そして脱植民地化に抗う姿勢を浮き彫りにした。

第8章「結論—民族の新生と文化・開発・NGO」では、アエタ社会の再編と権利意識への目覚めと異議申し立て、エンパワーメントのあり方、NGOとの利害関係、人類学における民族や出来事を記述することに対する著者ならではの回答と可能性を提示している。

以上が本書の概要である。今日改めて本書を取り上げるにあたり評者からコメントをいくつか付したい。

まず、本書の重要な意義として、「民族や文化の捉え方」と「創造的復興」の2点についての考察を挙げる事ができる。前者に

関しては、先住民としての覚醒と主張を通して、先住民や文化が実体化あるいは実在化したことを捉えたことはユニークである。かつて民族や文化は静態的あるいは固定的なものであるかのように記述されることがあったが、本書では災害による伝統的な生活や生業、土地利用の歴史変容を通して民族や文化をアエタ自身が主体的かつ内発的に捉え直していく過程を明らかにした。これは著者が一貫して関心を抱く「出来事を受容と懐柔をとおした社会や文化の変容と持続」(p. 25) に当てはまるだろう。また、第3章の最後にある「関わりや関与を通して、近現代世界と周辺地域との接合と摩擦の現場から、世界の捉え直しと作り直しの方途を探っていくことの意味」(p. 105) という問題意識も示唆深い。今日、研究者など外部の者が民族・文化・宗教・マイノリティなどを代弁・表象する際に直面する二面性、すなわち、権利主張と分断について、現場の人々にいかに関与することができるかを出発点として考察した本書を通して、分断や対立を生み出すことなく民族や文化の意味を再考し実践することの重要性を痛感した。

また、創造的復興、いわゆるレジリエンスに関して、「地域を/で研究する」地域研究ならではの視点から画一的でない復興のあり方を照射したことは意義がある。大規模な災害によって社会経済インフラと生活基盤が破壊された後、被災者が旧来のシステムや慣行、生活様式の継続が困難な状況から立ち直るとき、新しい生業と生活スタイル、自己意識、時間・歴史認識、地理・空間認識を獲得

する。そうして新しい人間・社会へとになっていくことを著者は新装版あとがき「噴火から30年一再び、変化と持続をめぐる」において「創造的復興」と呼んだ。本書の内容に引きつけていえば、アエタ民族が創造的復興を可能にしたのは、過去と未来の間の中に今を位置づけたこと、加えて国を跨いだネットワークの支援を利活用し地理的・空間的認識を拡大させたことにあった。著者は別の論集でも新しい人間・新しい社会の創造を考究しており〔清水・木村 2015〕、今日のハード対策一辺倒な復興に対して、個々の生を支える創造的復興のあり方についての研究が、本書を契機に展開しつつある。

こうした鋭い視点を有している本書であるが、欲をいえば、さらなる展開をみたかった点がひとつある。それは他のアクターとの地続きの相互作用である。つまり、本書では被災したアエタたちの先住民であることの自覚は十二分に描写されていた一方で、平地民アエタやフィリピン人との邂逅、また開発に携わったNGOの視点についての記述と分析が物足りないと感じた。確かに、本書では、人類学の課題に対して、先住民の苦悩や新生の記述と分析、また著者の内省を通して果敢に挑戦していた。しかし、アエタと他のアクターとの相互作用については、断片的な記述に留まっていると感じた。社会経済・政治の動態に加え、さまざまなアクターの様相や声を描写することで、先住民の自覚に加え、内発的な文化の発展をより際立たせて照射できたはずである。開発や民族自覚の章もあったがゆえに、後景化しがちなこれらの視

点や語りもあれば、より重層的に文化そのものや創造的復興に迫り、浮き彫りにできるのではないかと評者は感じた。

さて、いくつか評者が感じた点を挙げたが、インゴルドが唱える「人々についての研究」から「人々とともに研究する」姿勢、学問の礎へと転換する不屈の精神〔インゴルド 2020〕にも似た、先駆的な著作であったと感じる。改めて強調しておく、本書の今日における意義は、ピナトゥボ大噴火から30年をかけて、アエタ民族だけでなく時を経て変容してきた自己とも対峙し、内省しながら、コミットする人類学の方向性を打ち出したことにある。ホームとフィールドを往還し、応答しつつ、人類学の系譜に紐付けて自己内省する姿勢は、地域研究者にとって人のふり見て我がふりを直す写し鏡のような存在であり、読み手に深い共感を呼ぶ。今日も通奏低音として鳴り続けるこだまの実相、そしてともに苦悩しながら応答する姿勢を、ぜひ本書を手にとって読んでいただきたい。

#### 引用文献

- 清水 展・木村周平編. 2015.『新しい人間, 新しい社会—復興の物語を再創造する』災害対応の地域研究 5. 京都大学学術出版会.
- インゴルド, ティム. 2020.『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳, 亜紀書房.

ボニー・ヒューレット、『アフリカの森の女たち—文化・進化・発達の人類学』服部志帆・大石高典・戸田美佳子訳，春風社，2020年，420p.

田中文菜\*

本書は、*Listen, Here Is a Story: Ethnographic Life Narratives from Aka and Ngandu Women of the Congo Basin* [Hewlett 2013] の翻訳である。著者のボニー・ヒューレットは、中央アフリカ共和国、コンゴ共和国、ガボン、エチオピアで、主に思春期の子どもの発達について調査を行ってきた。中央アフリカ共和国の森でフィールドワークを行っていた著者に、大人の女性たちが「私の話も聞いて」と言ってきたことが、この本を書くきっかけになったという。本書は、ピグミー系狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥそれぞれの高齢期（70歳頃）と壮年期（40歳頃）の女性4名のライフヒストリーが収録されている。彼女たちの語りを交えながら、著者は、文化・進化・発達などの切り口から、個人の生活世界や文化の諸相を読み解こうとしている。また、生活史理論、スキーマ理論、愛着理論、包括適応度と血縁淘汰の理論など、上記の切り口にかかわる幅広い理論が参照されており、中部アフリカの民族誌になじみのない研究者であっても、これらの理論を通して自分の研究との接点を見出すのではないと思われる。

本書は7つの章から成る。「はじめに一岐

路に立つ女性の生活」では、著者のフィールド経験、本書を書くことになった経緯、調査の方法、調査対象者の概要が書かれている。「第1章 森と村の世界」では、調査地の社会経済的背景と歴史的背景、そこに住む狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥの概要と両者の関係が述べられ、それらに関する女性たちの語りが書かれている。「第2章 森と村の子どもたち」では、アカとンガンドゥの子ども期の生活の特徴が述べられ、女性たちの幼い頃の記憶についての語りが書かれている。「第3章 良き人生の諸構成要素」では、思春期から成人期前期についての語り書かれ、文化、生態学、生物学の観点から、女性になることが考察されている。「第4章 結婚と母親期—厳しくも喜びのある現実」では、子どもを産むことと喪うこと、それに伴う愛することと悼むことの語りから、悲嘆の感覚の多様性と共通性が考察されている。「第5章 女性であることの帰結」では、家庭内暴力や離婚についての語り書かれ、それらと、ジェンダー、階層や平等主義、行為主体性、グローバリゼーションとの関係が考察されている。「第6章 世代間の繋がり」と祖母たち」では、政治的、経済的な影響、加齢やジェンダー、生涯を通じた家族関係について、高齢期の女性たちと彼女らを取り巻く人々による語り書かれている。「第7章 結論—グローバリゼーションと変化の力」では、急速に変化する生態環境、社会文化的状況、地域的および国家的な力、グローバリゼーションといった変化とそれらへの対応が女性たちの語りにみられることが述べられている。そして、レジ

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

リエンスのある女性たちは激動の時代の変化への適応力を持ち、社会の価値観や文化的信念が存在できる場所を作り出しつつ、文化の伝統を維持することが可能であると締めくくっている。

日本語版の本書では、著者に許可を得て訳注や学術用語の解説を付け加えることにより、多岐にわたる本書の内容を理解するための工夫がなされており、英語版以上に女性たちの語りの背景や含意を考えさせるものになっている。さらに、中部アフリカで長年フィールドワークを行ってきた研究者たちによるコラムと、著者と専門分野の近い高田明と竹ノ下祐二による解説が、より一層本書を魅力的なものにしている。

本書の特徴は、「ナラティブ・インタビュー」という手法を用いていることである。自伝的なナラティブを通して、アカとンガンドゥの女性たちの人生経験、そして、彼女らがどのように世界を捉えているかがみえてくる。女性たちの愛や喜び、悲嘆、死への向き合い方、悲しみを乗り越えて前を向く強さなど、心の深い部分がみえ隠れし、うかがい知ることができる。評者は、カメルーンの熱帯雨林に住むバカの子育ての調査をしている。バカとアカはいずれもピグミーという総称で知られており、ピグミーのなかでも互いに近縁な集団である。評者が初めてフィールド調査に入った日の朝、バカの新生児が出産時に亡くなった。その母親は、高い声で遠い村に住む自分の母親に呼びかけ、泣き叫んでいた。そのときは子どもを失ったことを悲しむ様子を傍らで見ることはできなかったが、本書のよう

に、話を聞いてと言ったその人の回想に耳を傾けることで、我が子の死に対する心の葛藤、次の出産に対する迷いなど繊細な部分が見えてくると思った。

また、狩猟採集民アカと農耕民ンガンドゥのナラティブの対比から、人や物事や環境の認識の仕方や振る舞い方の特徴が浮き彫りにされている。「アカの基盤スキーマには、異なる年齢と性別間の平等主義、シェアリングという価値観、社会的役割の流動性、個人の自立の尊重、他者への信頼が含まれる。ンガンドゥの基盤スキーマには、はっきり区別される性役割、年齢と性別による階層、両親・年上の兄弟姉妹などの年配の個人に対する服従と尊敬、クランやリネージを同じくする特別な他者に対する義務、物質的なやりとりが土台となった社会関係、呪術への強い信仰、そして他者への一般的な不信感が含まれる [Hewlett, B. L. and Hewlett, B. S. 2008; Woodburn 1982]」(p. 107) たえば、アカの女性は、「男と女の仕事はあまり変わらないよ。もし女が疲れていたら、男は木を探して火を起し、水を手に入れて、料理をするだろう」(p. 130) と語っている。アカは、状況におうじて各人が柔軟に行動し、役割の流動性がみられる。バカも、家事、生業、育児において役割の流動性がみられ、集団として連携し、協力していた。アカの女性は、「分かち合うのは食べ物だけでなく多くのものよ。子どもたちの世話もまた同じ」(p. 320) と語っている。シェアリングという価値観が、食べ物や料理のシェアだけでなく、子どもたちの世話や作業のシェアなどを

含む、幅広いものでもあることがうかがえる。これまで多くの研究者が、ピグミーの子育てに注目し、行動観察のデータに基づいて、ピグミーでは「共同育児」が活発に行なわれることが特徴だと論じてきた [Tronick *et al.* 1987; Hewlett 1991]。本書のようなナラティブの分析により、そうした共同育児がどのような社会システムにおいて、どのような価値観のもとで行なわれているのかが、具体的にみえてくるのではないだろうか。アカの女性は「私が出産しても、ココテ（夫）の母親はくたびれすぎて助けてくれないわ。最年長の娘エラカは結婚して、夫のキャンプに行ってしまった。私と一緒にいて、手助けして、食べ物をくれて子どもの世話をするのはココテ。他には誰もいないわ。キャンプにいる私の友達はその時が来たら助けてくれるだろうけど、彼女たちも自分たちの子どもの世話がある」（p. 218）と語っている。友だちは助けてくれるが、いつもではない。ひとくちに共同育児といっても、そのなかにはさまざまな人間関係があることを、このような語りを通してうかがい知ることができる。量的研究では取り扱うことが困難な文脈を、ナラティブを通して把握することにより、個人の生活世界や文化の諸相をより深く理解することができるだろう。

しかし、ナラティブが実際に現実に起こったことと完全に一致していることはなく、語り手と聞き手が再構成したものであるという点は、前提として踏まえておく必要がある。たとえば、パートナー関係や家庭内暴力などについては、相手側の認識は異なってい

るかもしれない。今回は女性の語りであったが、男性の語り加わることにより、人間関係や出来事の文脈をより多面的に理解できるのではないだろうか。また、今回の女性のライフヒストリーでは、幼少時代、結婚、夫婦関係、出産などがクローズアップされているが、出産後どのように子どもを育てあげたかについては、具体的な話が少なかった。彼女たちの共同育児という子育て環境や子育て観ゆえに、語りが少なかったのだろうか。それとも、インタビューの仕方や本の編集方針などの理由によるものだろうか。

本書には、女性であり母親であり人類学者である著者のライフヒストリーも掲載されている。著者がフィールドに入る際の経験もくわしく書かれており、これからフィールドワークをはじめめる人に参考になるだろう。そして、現地の人々と著者の関わり方がみえてくる丁寧なフィールドワークの記述は、スキルの伝達が難しいナラティブ・インタビューのひとつの手本として貴重だといえる。

#### 引用文献

- Hewlett, B. L. 2013. *Listen, Here Is a Story: Ethnographic Life Narratives from Aka and Ngandu Women of the Congo Basin*. New York: Oxford University Press.
- Hewlett, B. S. 1991. *Intimate Fathers: The Nature and Context of Aka Pygmy Paternal Infant Care*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Hewlett, B. L. and B. S. Hewlett. 2008. A Biocultural Approach to Sex, Love, and Intimacy in Central African Foragers and Farmers. In W. R. Jankowiak ed., *Intimacies:*

*Love and Sex Across Cultures*. New York:  
Columbia University Press, pp. 37-64.  
Tronick, E. Z., G. A. Morelli and S. Winn. 1987.  
Multiple Caretaking of Efe (Pygmy) Infants,

*American Anthropologist* 89(1): 96-106.  
Woodburn, J. 1982. Egalitarian Societies, *Man* (N.  
S.) 17(3): 431-451.